仕事は、異なるものをつなぐパートナーシップ
～わからないから、面白い～

本作は、実際の体験から生まれた物語です。
登場人物、団体、会社、地域の名称や設定、
出来事の順序などには、一部創作が含まれています。

目　　次

プロローグ　違うものが出会う場所
第一章　お姉ちゃんになった日
第二章　外の世界に居場所をつくる
第三章　世界地図の向こう側
第四章　家族という会社
第五章　戻る人、戻りたくない人
第六章　ひび割れ
第七章　正しさの迷路
第八章　甘えられなかった女たち
第九章　ふたりの会話
第十章　父の封筒
第十一章　会社の空気が変わるとき
第十二章　社長の椅子から降りる日
第十三章　ふたりの会社
第十四章　受け継がれたもの
エピローグ　結婚も仕事も

プロローグ　違うものが出会う場所

　試作品のグラスを窓辺に置くと、午後の光が琥珀色の液体を透かした。

「お茶なのに、だしの香りがする」

由希子が言うと、向かいに座っていた若い女性が心配そうに眉を寄せた。

老舗の茶舗を継いだばかりの三代目である。
隣には、乾物屋を営む無口な男性が腕を組んでいた。

二人は同じ商店街に店を構えながら、今日までまともに話したことがなかった。

「変でしょうか」

「変よ」

由希子はためらわずに答え、二人の顔が同時に曇るのを見てから笑った。

「でも、新しいものは最初、だいたい変なの。

知っているもの同士を、知っている形で合わせても、知っているものしか生まれないでしょう」

乾物屋の男性が、初めてグラスを手に取った。

「昆布を前に出しすぎたかもしれません」

「では、引っ込めるのではなく、お茶が一番香る瞬間に昆布が追いかけるようにしてみましょう」

三代目がノートを開き、男性が身を乗り出す。
さっきまで互いに遠慮していた二人の間に、一本の細い橋がかかったように見えた。

由希子は、こういう瞬間が好きだった。

異なるものが、相手を消さずに並ぶ瞬間。どちらかが正しく、どちらかが間違っているのではなく、違いがあるからこそ三つ目の何かが生まれる瞬間。

「由希子さんは、人と人を結婚させるみたいですね」

三代目が冗談めかして言った。

「ええ。商品も会社も、結婚と似ていますから」

言いながら、由希子は自分でも少し可笑しくなった。

　結婚という言葉を、こんなに穏やかな声で言える日が来るとは思わなかった。

かつての由希子にとって、結婚は幸せの象徴ではなかった。夫に裏切られ、家族に振り回され、自分を失う場所だった。仕事も同じだった。

認められるために頑張り、役に立つことでしか自分の居場所を作れない場所だった。

それでも今、由希子は知っている。

結婚も仕事も、自分を犠牲にすることではない。

異なるものが、それぞれの形を保ちながら、まだ見たことのない何かを生み出すことなのだ。

そのことを知るまでに、由希子は半生を使った。

すべての始まりは、母のたった一言だった。

「今日からお姉ちゃんなんだから、一人でできるわね」

第一章　お姉ちゃんになった日

　弟が生まれた日のことを、由希子は匂いで覚えている。

　煮沸された哺乳瓶の甘いような匂い。新しい布団の糊。大人たちの服についた冬の外気。そして、母の胸元から漂う、乳と汗の混じった匂い。

　五歳の由希子は、母の隣に座ろうとした。

「ゆきちゃん、ちょっと待ってね」

母の澄子は、赤ん坊を抱き直しながら言った。
赤ん坊は細い声で泣き、親戚の女たちは「かわいい」「お母さんにそっくり」と代わる代わる顔をのぞき込んだ。

由希子は、空いた母の膝を見つめた。昨日まで、そこは自分の場所だった。

「お母さん、お水」

「台所にあるでしょう。今日からお姉ちゃんなんだから、一人でできるわね」

澄子は笑っていた。褒めるような声だった。
けれど由希子の耳には、扉の閉まる音に聞こえた。

今日から、ここには入ってはいけない。

　由希子は台所へ行き、踏み台を引きずった。
重たいガラスのコップを両手で持ち、水道の栓をひねる。勢いよく出た水が袖を濡らしたが、誰も気づかなかった。

泣けば母が来るかもしれないと思った。しかし泣くのは赤ん坊の役目になっていた。

由希子は唇を噛み、濡れた袖を隠した。

　弟の和也は病弱だった。夜中に熱を出し、食べたものを吐き、病院へ運ばれた。澄子はいつも和也のそばにいた。父の正治は仕事から帰ると、黙って財布から金を出した。

「必要なものを買え」

それが父のやさしさだと、大人になった由希子は知ることになる。しかし子どもの由希子には、父は家族の中にいない人に見えた。

　ある日、学校で使う色鉛筆が短くなり、由希子は父に頼んだ。

「新しいのがほしい」

正治は新聞から目を上げず、百円玉を二枚、卓上に置いた。

「お母さんと買ってこい」

「お父さんも来る？」

「仕事がある」

由希子は百円玉を握った。冷たくて、重かった。

家の中で、自分のことを見ている人はいない。

　そう思うと、学校は別の世界になった。先生は、由希子の書いた作文を褒めてくれた。運動会で一番になると、友だちのお母さんまで拍手してくれた。音楽会で木琴を間違えずに叩けば、担任が肩を抱いた。

「由希子ちゃんは、しっかりしているね」

その言葉は、母の膝の代わりになった。

由希子は、しっかりすることにした。

忘れ物をしない。頼まれた仕事は断らない。泣かない。甘えない。人より早く気づく。人より多く動く。

　小学校の学芸会で、主役の子が熱を出したとき、先生は由希子に代役を頼んだ。

「急で悪いけれど、あなたならできると思って」

胸が熱くなった。

あなたならできる。

母に言われた同じ言葉なのに、学校で聞くと愛されているように感じた。

　由希子は台詞を一晩で覚えた。舞台の上で大きな声を出し、幕が下りたとき、誰よりも長く拍手を浴びた。

客席の後ろに、母と父がいた。澄子は和也を抱いていた。正治は仕事着のままだった。

由希子は、二人が自分を見ていると思った。

だが終演後、澄子が最初に言ったのは、

「和也が途中で泣かなくてよかったわ」だった。

何をしても、どんなに頑張っても、
母は認めてくれない・・・

　その夜、由希子は布団の中で決めた。

家ではなく、外で認められよう。

家族に必要とされなくても、誰かに必要とされる人になろう。

それは子どもの決意にしては、あまりに固く、長く、由希子の人生を支配することになった。

第二章　外の世界に居場所をつくる

　中学生になると、由希子はバレーボール部に入った。

　背が高いわけでも、運動神経が飛び抜けてよいわけでもなかった。ただ、誰よりも先に体育館へ行き、誰よりも遅くまで床を拭いた。ボールかごを運び、ネットのたるみを直し、先輩の水筒が空いていれば水を汲んだ。

「由希子がいると助かる」

顧問のその言葉を、由希子は宝物のように胸にしまった。

　高校では、授業が終わると駅前の喫茶店で働いた。店主の妻が腰を痛めたと聞けば、頼まれる前に閉店後の掃除まで引き受けた。試験前でも休まなかった。

「勉強、大丈夫なの」

同級生に言われると、由希子は笑った。

「大丈夫。私、時間の使い方がうまいから」

本当は眠かった。朝、机に向かったまま目を覚ますこともあった。それでも、店主に「君がいないと回らない」と言われると、疲れが消えた。

必要とされることは、由希子にとって空気のようだった。吸っている間だけ、自分が生きていると感じられた。

　そんな由希子が、初めて自分のために抱いた夢が、世界一周だった。

高校の図書室で見つけた一冊の旅行記に、異国の港町の写真が載っていた。白い壁、青い海、見たことのない文字の看板。写真の中の人々は、由希子の知らない暮らしをしていた。

この世界には、家族の外、学校の外、町の外がある。その事実に救われた。

　大学へ進む余裕はなかったため、由希子は旅行会社への就職を目指した。英語の勉強をし、地理を覚え、面接では「世界中の人に旅の喜びを伝えたい」と話した。

採用通知が届いた日、澄子は台所で夕飯を作っていた。

「旅行会社に受かった」

「そう。よかったね」

澄子は振り返り、笑った。だがすぐに鍋へ視線を戻した。

「制服代とか、最初にお金がかかるんじゃない？
お父さんに言っておくわ」

由希子は、またお金の話かと思った。

「いらない。自分で払うから」

「無理しなくても」

「無理じゃない」

言葉が尖った。澄子の背中がわずかに固くなった。

由希子は、自分でもなぜ腹が立つのかわからなかった。認めてほしいのに、心配されると突き放されたように感じる。助けてほしいのに、助けられると負けたように感じる。

翌春、由希子は旅行会社の制服に袖を通した。

カウンターに立ち、旅程表をめくり、顧客の希望を聞く。新婚旅行、慰安旅行、親孝行の旅、失恋を忘れるための一人旅。人は皆、今いる場所から少し離れるために旅へ出た。

由希子は仕事が好きだった。

上司は失敗を叱ったが、理由も説明した。同僚は忙しいときに声を掛け合った。家では誰も尋ねなかった「どう思う？」を、職場では何度も聞かれた。

「由希子さんなら、どういう旅程を組む？」

そう問われるたび、胸の中に自分の居場所が一つ増えるようだった。

入社三年目、法人営業の担当者として出入りしていた男がいた。名前は高瀬圭介。製造会社向けの資材を扱う商社の営業で、いつも少し大きな鞄を持ち、よく笑った。

ある日、圭介は社員旅行の見積もりを頼みに来た。

「うちの社長、温泉は嫌だ、でも宴会はしたい、移動は短くしろって。由希子さんなら、どうします？」

「社長を置いていきます」

由希子が真顔で答えると、圭介は一拍遅れて吹き出した。

「それ、見積書に書けます？」

「特記事項に」

その日から、圭介は用がなくても窓口に顔を出すようになった。

由希子は、彼の明るさを軽薄だと思った。
誰にでも愛想がよく、困ったときは周りに平気で助けを求める。

「由希子さん、これ読めます？僕、横文字に弱くて」

「営業でしょう」

「営業だから、わからないものはわかる人に聞くんです」

由希子には、その態度が理解できなかった。
わからないと言える。助けてと言える。失敗しても笑える。

それは、由希子が最も嫌っていた種類の人間だった。

同時に、目を離せない種類の人間でもあった。

第三章　世界地図の向こう側

　圭介との交際は、旅程表を作るようには進まなかった。

由希子は約束の時間より十分早く着き、圭介は五分遅れて走ってきた。由希子は店を予約し、圭介は「その日の気分で決めよう」と言った。

由希子が将来の計画を尋ねると、圭介は雲を見ながら「面白い仕事をしたい」と答えた。

「面白いって、何を？」

「まだわからない」

「わからないことを目標にできるの？」

「わからないから、面白いんじゃない？」

由希子には、地図を持たずに旅へ出る人の気持ちがわからなかった。

それでも、圭介といるとなぜか安心感があった。

　圭介は、由希子が何でも一人でやろうとすると、勝手に荷物を半分持った。由希子が「大丈夫」と言っても返さなかった。

「大丈夫な人ほど、手伝ってもらえばいい」

「意味がわからない」

「弱ってから手伝うより、元気なうちに一緒にやったほうが楽しいやん」

その考え方も、由希子にはなかった。

　ある雨の日、二人は駅の高架下で雨宿りをした。圭介は急に言った。

「僕と結婚せえへん？」

「急ね」

「ずっと考えてた」

「どこで暮らすの」

「大阪。実家の近く」

「仕事は」

「辞めてもらうことになるかもしれん」

由希子の中で、警報が鳴った。

旅行会社は、家の外に自分で作った場所だった。そこでの自分は、娘でも姉でもなく、由希子として必要とされていた。

「私、仕事が好きなの」

「知ってる」

「辞めたくない」

圭介はしばらく黙った。

「仕事を辞めてほしいんやない。僕と一緒に暮らしてほしい。両方できる方法を探そう」

その言葉に、由希子は少しだけ心を動かされた。

両方できる方法。

由希子の人生には、いつもどちらかしかなかった。家で頑張るか、外で頑張るか。

　結婚を決めた夜、澄子は長い間、黙っていた。

「大阪は遠いね」

「新幹線なら近いわ」

「そうだけど」

澄子は何か言いたそうにして、結局、箪笥から白い風呂敷包みを出した。中には、由希子が幼い頃に着ていた小さな赤い上着があった。

「これ、取ってあったの」

「どうして？」
「初めて買った子ども服だから」

由希子は上着に触れなかった。

母が自分を大切にしていた証拠を、今さら見せられても困ると思った。

　結婚式の日、正治はほとんど話さなかった。披露宴の終わりに、由希子へ小さな封筒を渡した。

「困ったときに使え」

中には現金が入っていた。

「またお金」

由希子は思わず言った。

正治の顔が一瞬、傷ついたように見えた。しかし父は何も言わず、封筒を由希子の手に押し戻した。

「お前は、遠慮するから」

その一言だけを残し、父は親族の輪へ戻っていった。

　新幹線が故郷の町を離れるとき、ホームまで見送りに来た父と母。由希子は涙をこらえた。

寂しいのではない。自由になるのだと自分に言った。これからは、自分の理想の家族を作る。

母のようにはならない。父のような無関心な人とも暮らさない。夫婦は何でも話し合い、子どもには寂しい思いをさせない。

　由希子は、まだ知らなかった。

強く否定したものほど、形を変えて自分の人生に現れることを。

第四章　家族という会社

大阪での新婚生活は、思っていたより狭かった。住まいの間取りではない。人間関係の距離が狭かった。

圭介の実家は、自動車部品を作る東和工業という会社を営んでいた。創業者である祖父が一代で築き、現在は圭介の父・浩一が社長、叔父が専務、従兄が営業部長を務めていた。

家と会社の境目はなかった。日曜の昼食で売上の話が始まり、盆の墓参りで人事の不満が飛び交った。社員の失敗は親族の恥になり、親族の喧嘩は翌朝の会議に持ち込まれた。

初めて親族の食事会へ出た日、由希子は義母の房江に台所へ呼ばれた。

「由希子さん、圭介に余計なことを言わないでね」

「余計なこと、ですか」

「あの子はすぐ熱くなるから。会社のことは男の人に任せておけばいいの」

食卓では、浩一と叔父が新しい設備投資をめぐって怒鳴り合っていた。

「お前は数字がわかってない！」

「兄貴こそ、昔のやり方にしがみついてるだけや！」

　圭介が口を挟むと、浩一は箸を置いた。

「お前は外の会社の人間や。口を出すな」

帰り道、圭介は笑っていた。

「いつものことや」

「いつも、あんなふうなの？」

「家族やから遠慮がないんやろ」

「家族だからって、何を言ってもいいわけじゃないでしょう」

「まあ、そうやけど」

圭介は深刻に受け取らなかった。

　由希子は東和工業が嫌いになった。
人を家族という枠で縛り、会社という鍋で煮込んでいるように見えた。

　やがて長女の美咲が生まれ、二年後に次女の遥が生まれた。由希子は仕事を辞め、専業主婦になった。

最初は子どもたちに、母からもらえなかったものをすべて与えようとした。泣けばすぐ抱き、話しかければ手を止め、毎晩絵本を読んだ。

だが、子どもは思い通りには育たなかった。

美咲は支度が遅く、何度言っても忘れ物をした。遥は人見知りで、幼稚園の門で毎朝泣いた。

「自分でできるでしょう」

ある朝、由希子は美咲に言った。

「もうお姉ちゃんなんだから」

言った瞬間、胸の奥で何かが鳴った。

だが忙しさに押され、その音を聞かなかったことにした。

　圭介は商社の仕事が忙しく、帰宅は遅かった。休日も取引先とゴルフに出かけた。由希子は一人で家事と育児を回した。

「少しは手伝って」

「手伝ってほしいなら言ってくれたらええやん」

「見ればわかるでしょう」

「何をしたらいいか、わからん」

「どうしてわからないの」

由希子は腹が立った。自分はいつも、言われる前に周りを見てきた。困っている人がいれば動いた。

家族なら、なおさら気づくべきだと思った。

圭介は、由希子が怒ると黙った。黙られると、父の背中を思い出した。

「あなたって、お父さんと同じね」

「何の話や」

「都合が悪くなると、何も言わない」

圭介はますます黙った。

二人の間に、言葉ではなく解釈が積もっていった。

　そんな頃、東和工業で大きな取引先との契約が打ち切られた。浩一は圭介に会社へ入るよう頼んだ。

「このままでは会社がもたん。外で営業をやってきたお前の力が必要や」

圭介は迷っていた。

由希子は即座に反対した。

「絶対にやめて。あの会社に入ったら、私たちまで壊れる」

「親父も年や。放っておけへん」

「あなたを必要としているんじゃない。使いたいだけよ」

「それでも、家族や」

「家族だから何？」

由希子の声が大きくなった。

「家族なら、あなたの人生を奪っていいの？」

圭介は静かに言った。

「由希子も、僕の人生を決めようとしてるやん」

その言葉は、由希子の一番痛い場所に刺さった。

私はあなたを守ろうとしているのに。

そう言い返したかった。しかし、守ることと支配することの境目を、由希子はまだ知らなかった。

第五章　戻る人、戻りたくない人

圭介は東和工業に入ることを決めた。

由希子は離婚届を取りに行った。市役所の薄い紙を鞄に入れると、急に自分が強い人間になったような気がした。

「会社に戻るなら、私は子どもを連れて実家へ帰る」

夜、食卓に離婚届を置いた。

圭介は紙を見つめ、ため息をついた。

「そこまで言う？」

「私は、あの家族の中では暮らせない」

「僕と暮らすんやろ」

「同じことよ。あの会社に入ったら、あなたはあの家の人になる」

「僕は最初から、あの家の人間や」

圭介の声は穏やかだった。その穏やかさが、由希子には無責任に思えた。

由希子は、子育ての悩みを相談していた女性グループの代表に電話をした。年上の女性は長く話を聞いたあと、意外なことを言った。

「由希子さん、今回はご主人についていきなさい」

「なぜですか。あの家は普通じゃありません」

「普通かどうかではなく、ご主人が自分の人生を選ぼうとしているから」

「でも、私は嫌なんです」

「嫌なままでもいい。離れずに見てごらんなさい」

　由希子は納得しなかった。ただ、離婚して実家へ戻る自分を想像したとき、澄子に「だから言ったでしょう」と言われる気がした。それだけは嫌だった。

結局、由希子は圭介についていった。

　東和工業に入った圭介は、最初の一年で十歳老けたように見えた。浩一は「任せる」と言いながら、圭介が決めたことを翌日には覆した。叔父は営業の数字を隠し、従兄は現場の不満を圭介に押しつけた。

圭介は毎晩遅く帰り、食卓で会社の愚痴をこぼした。

「由希子なら、どう思う？」

最初、由希子は答えた。人員配置を変えたほうがいい。会議の記録を残すべきだ。取引先別に利益率を出したほうがいい。

旅行会社で培った段取り力が役に立った。由希子は家で表を作り、圭介に渡した。

「助かるわ」

圭介に言われると、胸が満たされた。

　いつの間にか由希子は東和工業の問題を自分の仕事のように背負っていた。圭介が報告を忘れれば叱り、判断を迷えば正解を示した。

「その言い方では、お父さんが反発するでしょう」

「じゃあ、どう言えばいい？」

「私が文章にする」

「全部、由希子に聞かんとあかんな」

圭介は冗談のつもりだった。だが由希子は、必要とされている証拠として受け取った。

　美咲と遥が学校で困っていることにも、由希子はすぐ答えを出した。

「友だちに嫌なことを言われた」

「あなたも言い返しなさい」

「算数がわからない」

「昨日、教えたでしょう。一人でやってみなさい」

子どもたちは次第に、由希子に相談しなくなった。

　ある夜、美咲が泣いて帰ってきた。部活動を辞めたいと言った。

「途中で投げ出したら、みんなに迷惑でしょう」

「でも、つらいの」

「つらいからって、やめていいの？」

「お母さんは、私の気持ちなんかわからない！」

美咲は部屋へ駆け上がった。

由希子は腹が立った。あなたのためを思っているのに。私がどれだけ頑張っていると思っているの。

　そのとき、玄関が開いた。圭介だった。

いつもより遅い時間で、酒の匂いがした。
ネクタイが曲がり、頬に見慣れない口紅のような色がついていた。

「それ、何」

「何が」

「頬」

圭介は手でこすり、目をそらした。

由希子の中で、それまで積み上げてきたものが、
一度に崩れる音がした。

第六章　ひび割れ

圭介は最初、何もないと言った。

「取引先の人と飲んでただけや」

「女の人？」

「男も女もいた」

「その中の誰かと、二人で会ってる？」

圭介は答えなかった。

沈黙は、どんな告白よりも雄弁だった。

相手は東和工業の取引先で働く女性だった。名前は玲奈。離婚経験があり、圭介より七歳年下。仕事の相談をするうちに親しくなったという。

「いつから」

「いつからなのよ」

由希子の声で、二階の床がきしんだ。美咲か遥が起きたのだろう。

圭介は顔を覆った。

「ごめん、、、半年前から」

その言葉で、由希子は自分の人生が否定されたように感じた。

家族のために仕事を辞めた。子どもを育て、圭介を支え、東和工業の問題まで考えた。頼まれなくても必要なことを見つけ、誰よりも正しく動いてきた。

それなのに、選ばれたのは自分ではない。

「私の何が悪かったの」

圭介は首を振った。

「由希子が悪いんやない」

「じゃあ、どうして」

「彼女といると、何もできなくても責められへんかった」

その言葉を、由希子は生涯忘れないと思った。

「私が、あなたを責めたから？」

「そういう意味やない」

「同じでしょう」

由希子は立ち上がり、食卓の上のコップを払い落とした。割れたガラスが床に散った。

美咲が階段の途中に立っていた。

「お母さん」

　由希子は我に返った。

「部屋に戻りなさい」

「でも」

「戻って！」

美咲は唇を震わせ、階段を上がった。

　翌日から、由希子は修復を始めた。

夫に尽くせば戻ってくると書かれた本を読んだ。食事を豪華にし、笑顔で迎え、圭介の話を否定せずに聞こうとした。

　様々なセミナーや講座に通い、眠る前に理想の夫婦をイメージし、朝晩ノートに感謝を書いた。

　知人に誘われてビジネスを始めた。「経済的に自立すれば、夫に依存しなくなる」と言われたからだ。化粧品と健康食品を買い、友人に電話をかけた。

「久しぶり。元気？　実は、すごくいいものに出会って」

口にするたび、自分が薄くなっていく気がした。

圭介は家に戻る日もあれば、戻らない日もあった。携帯電話を浴室まで持ち込み、画面を伏せて置いた。

由希子は眠れなくなった。夜中に圭介の鞄を調べ、レシートの店名を検索した。知らない番号に電話をかけそうになり、何度も指を止めた。

「お母さん、最近変だよ」

遥に言われても、由希子は笑った。

「大丈夫。お母さんが何とかするから」

何とかする。

それは由希子が最も得意な言葉だった。そして今、最も由希子を苦しめる言葉になっていた。

頑張るほど、関係は悪くなった。

笑顔を作るほど圭介の視線が離れ、尽くすほど自分が惨めになった。講座で「あなたが変われば相手も変わる」と言われるたび、変えられない自分を責めた。

ある夜、圭介が帰宅すると、由希子は玄関に座っていた。

「今日は、どこにいたの」

「仕事」

「嘘」

「もうやめてくれ」

「やめるのは、あなたでしょう」

「僕は家に帰るのが怖い」

由希子は笑った。笑いながら涙が出た。

「裏切った人が、怖いって言うの？」

「何を言っても、由希子には正解がある。僕が何を言っても間違いになる」

「間違ったことをしているからでしょう！」

圭介は鞄を持ったまま、家を出た。

ドアが閉まったあと、由希子は玄関に座り込み、夜が明けるまで動けなかった。

家族、子育て、夫婦、会社。すべてを正しくしようとして、すべてが壊れていた。

由希子には、もう次に何を頑張ればいいのかわからなかった。

第七章　正しさの迷路

　冬の朝、由希子はパソコンの検索窓に「自分を知るとは」と打ち込んだ。

夫を変える方法でも、浮気をやめさせる方法でもなかった。自分でもなぜその言葉を選んだのかわからない。

　検索結果の中に、「新しい視点に出会う」という講座の案内があった。

――問題は外側にあるのではなく、自分の認識の中にある。

由希子は画面を閉じた。

「また、私が悪いっていう話でしょう」

そう呟きながら、翌日には申し込みの電話をかけていた。

　会場は駅近くの、緑が溢れるビルの一室。
大きな窓から差し込む陽の光、丸く並べられた白い椅子、中央に小さな花瓶。参加者は十人ほどで、年齢も職業もばらばらだった。

由希子は一番端の席に座った。

案内役の女性は、佐伯涼子と名乗った。五十代半ば、短い髪に紺色のワンピース。話し方は静かだが、目をそらさなかった。

「今日は、解決方法を持ち帰らないでください」

涼子の最初の言葉に、由希子は眉をひそめた。

「解決しないなら、何のために来たの」

隣の女性が小さく笑った。

参加者は順番に、自分の悩みを話した。

職場の人間関係、子どもの不登校、親の介護。
涼子は助言をせず、「その人を見たとき、あなたは自分をどう感じますか」と尋ねた。

由希子の番が来た。

「夫が浮気しています」

部屋の空気が少し動いた。

「相手の女性は、どんな人ですか」

「甘えるのが上手な人です。自分で何もできないふりをして、男の人に助けてもらう。仕事も中途半端で、困ったらすぐ泣くような人です」

「会ったことがあるのですか」

「写真と、夫の話でわかります」

涼子はしばらく黙って、由希子を見た。

「由希子さん。あなたが浮気しているのよ」

耳を疑った。

「何を言っているんですか」

「あなたの中にいる、甘えたいあなたを、外の女性に預けている」

「意味がわかりません」

「あなたは、甘える女性が嫌いですか」

「嫌いです。人に頼らず、自分でやるべきでしょう」

「どうして？」

「どうしてって、それが大人だからです」

「誰に教わったの？」

由希子の胸に、母の声がよみがえった。

今日からお姉ちゃんなんだから、一人でできるわね。

「母です」

「お母さんに甘えたかった？」

「別に」

即答した。しかし、声が震えた。

涼子は追い詰めなかった。

「玲奈さんを通して見ているものがあるとしたら、それは何か。答えを出さずに、見てみてください」

　帰宅後、由希子は怒りに任せてノートを開いた。

玲奈の嫌いなところ。

甘える。泣く。助けを求める。できないと言う。
男に頼る。弱いふりをする。かわいそうな自分を見せる。

書き進めるうち、ペンが止まった。

自分が一度も許されなかったことばかりだった。

　由希子は、五歳の自分を思い出した。濡れた袖を隠し、一人で水を飲んだ少女。弟を抱く母の背中を見ながら、泣かなかった少女。

本当は、抱っこしてほしかった。

一人でできると言われたくなかった。

私も赤ちゃんに戻りたい、と言いたかった。

由希子はノートを閉じた。認めたら負ける気がした。

翌週、その講座には行かないつもりだった。
それでも時間になると、足は会場へ向かっていた。

「わかりませんでした」

由希子は涼子に言った。

「何が？」

「私は甘えたいなんて思っていません」

「そう。では、甘えたくないあなたを、そのまま見ましょう」

「変えなくていいんですか」

「変えようとする前に、そうなったあなたを置き去りにしないことです」

由希子には、また意味がわからなかった。

ただ、その言葉を聞いたとき、胸の奥にいた小さな自分が、初めてこちらを向いたような気がした。

第八章　甘えられなかった女たち

　由希子は少しずつ、過去を書き始めた。

母に言われて傷ついたこと。
父に聞いてほしかったこと。
弟を憎いと思ったこと。

誰かに必要とされるために、嫌なことまで引き受けたこと。

書いた言葉は、どれも醜く見えた。

特に「弟がいなければよかった」と書いたとき、由希子はノートを破りそうになった。

けれど涼子は言った。

「思ったことと、実際に傷つけることは違います。思いをなかったことにすると、その思いは別の形で人生に現れます」

　由希子は、玲奈を憎む気持ちも書いた。

消えてほしい。夫に捨てられればいい。
あなたのような女がいるから、真面目な女が損をする。

書き終えたあと、由希子は深く息を吐いた。

ある日、美咲が台所へ来た。

「お母さん、部活、やっぱり辞めたい」

由希子の口から、いつもの言葉が出かかった。
途中で投げ出したら迷惑でしょう。

だが、その言葉の奥にいる五歳の自分が見えた。

「どうして辞めたいの？」

美咲は驚いた顔をした。

「話しても、怒らない？」

その一言が痛かった。

「怒らないようにする」

「ようにする、なんだ」

美咲は少し笑い、顧問から皆の前で何度も体型をからかわれたことを話した。由希子は怒りで手が震えた。すぐ学校へ電話をしそうになったが、まず美咲に尋ねた。

「どうしてほしい？」

「今日は、ただ聞いてほしい」

由希子は黙って聞いた。

解決しなくても、二人の間に何かが戻ってくるのを感じた。

　数日後、澄子から電話があった。正治が検査入院するという。

「大したことないって言うんだけどね。由希子、忙しいでしょう」

「行く」

「無理しなくていいよ」

その言葉に、以前なら腹を立てただろう。私に来てほしくないのか、と。

今回は、少しだけ立ち止まった。

「お母さんは、来てほしい？」

電話の向こうで、澄子が黙った。

「来てくれたら、心強い」

由希子は初めて、母が助けを求める声を聞いた。

　病院の待合室で、澄子は小さく見えた。由希子が知っている母は、いつも台所に立ち、病弱な和也を背負い、何でも一人で片づける人だった。

「お母さん、疲れたでしょう」

「大丈夫」

「大丈夫じゃなくてもいいよ」

自分が言った言葉に、由希子は驚いた。

澄子は笑おうとし、目に涙を浮かべた。

「私ね、ずっと由希子には甘えられなかった」

「私に？」

「あなたは何でもできたから。和也は放っておいたら死んでしまう気がして。あなたまで心配したら、私がもたなかった」

由希子の中で、長年固まっていたものにひびが入った。

「だから、一人でやりなさいって言ったの？」

「そんな言い方、した？」

「したよ。何度も」

澄子は額に手を当てた。

「ごめんね。私は、あなたなら大丈夫だと思ってた。信じていたつもりだった」

「信じるのと、放っておくのは違う」

「そうだね」　澄子は言い訳をしなかった。

由希子は、すぐに母を許せたわけではなかった。

　ある日、由希子の中で、ふと母と自分が重なる瞬間があった。

私も娘たちを信じているから一人でやりなさいって言ってる。お母さんも私を信じてくれていたんだ。

心の奥にあった塊が、溶けていくのを感じた。

　そして母もまた、甘えられなかった女なのだと知った。

祖母は早くに亡くなり、澄子は十二歳から弟妹の食事を作ったという。結婚してからは病弱な息子を抱え、無口な夫と家計を守った。

　由希子は、涼子から聞いた言葉を思い出した。

「思いをなかったことにすると、その思いは別の形で人生に現れると」

甘えたい思いをなかったことにしてきた女性たち。
それが夫の浮気相手に現れたのかと感じた。

母は由希子を愛していなかったのではない。

愛し方を知らなかったのだ。

そして由希子も、美咲や遥や圭介を愛していなかったのではない。

自分が知っている方法でしか、愛せなかったのだ。

病院からの帰り、由希子は圭介に電話をした。

「今、話せる？」

「何かあった？」

「お父さんは大丈夫。そうじゃなくて」

由希子は駅のホームで、行き交う人を見ながら言った。

「私、本当はあなたに甘えたかったみたい」

電話の向こうが静かになった。

「でも、甘え方がわからなくて、あなたが私の思い通りに動くことを、助けてもらうことだと思ってた」

「由希子」

「帰ってきてとは、まだ言えない。玲奈さんのことも許せない。でも、私が何を感じていたのか、初めて少しわかった」

圭介は長く黙ったあと、

「僕も、話したい」と言った。

第九章　ふたりの会話

二人は、家ではなく喫茶店で会った。

家には過去の言い争いが染みついていた。食卓を見るだけで、どちらが正しいかを争い始めてしまう気がした。

圭介は痩せていた。由希子も同じだった。

「玲奈とは、終わらせる」

圭介が先に言った。

「私が変わったから？」

「違う。僕が決めることや」

由希子はその言葉に、わずかな安堵を感じた。以前なら「今すぐ終わらせて」と迫っていただろう。だが、命令で終わる関係なら、また命令で始まるかもしれない。

「どうして、玲奈さんだったの」

圭介はコーヒーを見つめた。

「僕が会社で何をしても、親父には足りないって言われた。家に帰っても、由希子には段取りが悪い、考えが甘いって言われた」

「本当のことでしょう」

反射的に言い、由希子は口を閉じた。

圭介は苦く笑った。

「そういうところや」

「ごめん。続きを聞く」

「玲奈は、僕の話を聞いて、よう頑張ってるって言った。最初はそれだけで救われた。僕は、誰かに認めてほしかったんやと思う」

由希子は胸の奥がざわついた。

認めてほしかった。

それは、自分と同じだった。

「だからって、浮気していいことにはならない」

「わかってる。僕が逃げた。由希子と話すのが怖くて、会社と向き合うのもしんどくて、簡単に褒めてくれるところへ逃げた」

圭介は頭を下げた。

「ごめん」

由希子はすぐに「いいよ」と言えなかった。

「私は、まだ苦しい。あなたが携帯を持つだけで疑うと思う。帰りが遅ければ、また玲奈さんと会っていると思う。何度も聞くかもしれない」

「聞いてええ」

「怒るかもしれない」

「怒ってええ」

「でも、私も、あなたを正しくしようとするのをやめたい」

圭介は顔を上げた。

「やめられる？」

「すぐには無理」

二人は同時に笑った。久しぶりに、同じことを面白いと思えた。

　圭介は玲奈との関係を終わらせた。連絡先を消したからといって、由希子の不安が消えるわけではなかった。夜中に目を覚まし、圭介の寝息を聞きながら泣く日もあった。

そのたびに由希子は、「不安になっている」と言った。

以前の由希子なら、「あなたが私を不安にさせている」と言っただろう。

二つの言葉は似ているようで、違っていた。

圭介も、すぐに正解を答えようとしなくなった。

「今日は会社で、親父に全部否定された」

「どうしてほしい？」

由希子が尋ねる。

「今日は、ただ聞いてほしい」

美咲と同じ答えに、由希子は笑いそうになった。

　ある晩、遥が学校の進路希望票を持ってきた。
美術系の学校へ進みたいという。

「将来、仕事になるの？」

由希子の口から、心配が飛び出した。

遥の顔が曇る。

由希子は息を吸った。

「ごめん。心配が先に出た。どうして行きたいのか、聞かせて」

遥は自分の描いた絵を見せた。異なる色の布をつなぎ合わせたような抽象画だった。

「違う色が隣にあると、片方だけのときよりきれいに見えるの」

由希子は絵を見つめた。

違うものは、争うだけではない。

隣り合うことで、互いを鮮やかにすることもある。

　その夜、由希子は涼子にメールを送った。

〈私、家族を同じ色に染めようとしていたみたいです〉

返事は短かった。

〈気づいた由希子さんは、もう違う色を見ています〉

第十章　父の封筒

　正治の検査結果は、すぐに命に関わるものではなかった。ただ、入退院を繰り返すようになり、由希子は故郷へ通った。

　ある午後、病室で二人きりになった。

正治は窓の外を見たまま、ほとんど話さなかった。由希子は父の沈黙が苦手だった。子どもの頃と同じように、自分に関心がないように感じる。

「お父さんは、昔から何も聞いてくれなかったね」

由希子は思い切って言った。

「何を」

「学校のことも、仕事のことも、結婚のことも。困ったらお金を出すだけ」

正治はゆっくり由希子を見た。

「金しか、出せるものがなかった」

「どういう意味？」

「俺の親父は、酒を飲んで暴れる人だった。家には金を入れんかった。母親が泣いているのを見て、俺は、家族に金を渡せる男になろうと思った」

由希子は初めて聞く話だった。

「話を聞くとか、抱くとか、そういうことは、やり方がわからんかった」

　正治は枕元の引き出しから、古い財布を出した。その奥に、色の変わった小さな紙が入っていた。

由希子が旅行会社から初めてもらった給料で、父に贈ったネクタイの値札だった。

「どうして、こんなものを」

「うれしかったから」

「一度も言わなかった」

「言わんでも、わかると思った」

由希子は泣きながら笑った。

「わからないよ」

「そうか」

「お父さんが思ってることなんて、言ってくれなきゃ、わからない」

「そうか」

正治は同じ言葉を繰り返し、窓の外へ顔を向けた。耳が赤くなっていた。

「結婚式のときの封筒、覚えてる？」

「覚えてる。私、ひどいこと言った」

「あれは、逃げる金やった」

「逃げる？」

「大阪でつらいことがあったら、誰にも遠慮せず帰ってこられるように。お前は我慢するから」

由希子は息を止めた。

父は、自分が我慢することを知っていた。

　関心がなかった訳ではかった。見ていても、伝える言葉を持っていなかった。

「お父さん」

「何や」

「私、困ったこと、いっぱいあったよ」

「そうか」

「夫に浮気された」

正治の顔が強張った。

「そいつを連れてこい」

「何するの」

「話をする」

「殴るんじゃなくて？」

「殴ったら、お前が困るやろ」

由希子は声を上げて笑った。父も少し笑った。

帰り際、正治は言った。

「由希子」

「何？」

「よく、やってる」

子どもの頃から、ずっと欲しかった言葉だった。

けれど不思議なことに、その言葉を聞いた由希子は、飛び上がるほど嬉しくはならなかった。

もう、父の一言がなければ自分の価値を感じられない由希子ではなくなり始めていた。

「ありがとう。でも、やりすぎてた」

「そうか」

「これからは、少し人に頼る」

「そうしなさい」

正治は、いつものように短く答えた。

　病院の玄関を出ると、春の風が吹いていた。由希子は圭介に電話をかけた。

「駅まで迎えに来てくれる？」

以前なら、自分で帰れた。電車もバスも調べられた。

それでも、迎えに来てほしいと思った。

「もちろん」

圭介の声を聞き、由希子は初めて、頼ることが負けではないと感じた。

第十一章　会社の空気が変わるとき

　東和工業の問題は、由希子が両親への見方が変ったからといって、翌朝きれいに消えたわけではなかった。

浩一は相変わらず気分で指示を変えた。叔父は自分の失敗を隠した。現場には「どうせ親族で決める」という諦めが染みついていた。

変わったのは、圭介の仕事に対する姿勢だった。

　以前の圭介は、父に認められるために新しい提案を出し、否定されると由希子の助言を借りて反論した。今は、承認を得る前に、自分が何を守りたいのかを考えるようになった。

「この受注は断る」

役員会で圭介が言うと、浩一は机を叩いた。

「売上を捨てる気か！」

「今の納期では、現場に三週間の連続残業をさせることになる。去年、それで二人辞めた」

「昔は皆、それくらいやった」

「昔のやり方で、人が残らなくなってる」

浩一の顔が赤くなった。

「お前は会社を潰すつもりか」

「潰したくないから断る」

圭介は怒鳴り返さなかった。父の許可を求める息子ではなく、経営を担う一人の人間として座っていた。

会議のあと、浩一は三日間、圭介と口をきかなかった。

由希子は以前なら、「謝ったほうがいい」「言い方を変えたほうがいい」と助言しただろう。今回は、圭介に尋ねた。

「あなたは、どうしたい？」

「親父と喧嘩したいわけやない。でも、決めたことは変えへん」

「怖い？」

「怖い」

「そう」

由希子は、それ以上言わなかった。

受注を断った翌月、現場から小さな改善提案が相次いだ。

　無理な納期に追われなくなったことで、社員が工程を見直す余裕を持てたのだ。長年、赤字だった部品の加工時間が二割短縮された。

圭介は成果を自分の手柄にせず、提案した社員の名前を役員会で読み上げた。

「この会社は、親族だけで動いてるんやない」

叔父は不満そうだったが、浩一は黙って資料を見ていた。

　数か月後、浩一が工場で倒れた。軽い脳梗塞だった。命に別状はなかったものの、しばらく療養が必要になった。

親族は混乱した。誰が何を決めるのか。銀行への説明はどうするのか。浩一が一人で握っていた情報が多すぎた。

圭介は、叔父や従兄を排除しなかった。

「今までのやり方を責めても、会社は回らん。知っていることを全部、出してほしい」

「お前が社長になるつもりか」

叔父が警戒した。

「社長の椅子がほしいんやない。会社を止めたくない」

圭介は役割を分け、毎朝十五分の情報共有を始めた。会議では、誰が言ったかではなく、何が起きているかをホワイトボードに書いた。

由希子は直接会社に入らなかったが、議事録の書式や顧客管理の方法を一緒に考えた。

「また、私が全部作ってしまいそう」

パソコンの前で由希子が言うと、圭介が笑った。

「骨組みだけ頼む。中身は僕らで入れる」

「わかった。途中で口を出したくなったら？」

「お茶を飲む」

「三杯くらい必要ね」

二人は、役割を分ける練習をした。

浩一が退院した日、圭介は病院へ迎えに行った。由希子も付き添った。

車の中で、浩一は会社の状況を細かく尋ねた。圭介は説明し、最後に言った。

「親父が戻っても、情報を一人で持つやり方には戻さへん」

「俺が信用できんのか」

「信用の話やない。誰か一人が倒れたら止まる会社にせえへん」

浩一は窓の外を見た。

「勝手にせえ」

それは許可ではなかった。だが拒絶でもなかった。

　半年後、圭介は正式に社長へ就任した。

就任式のあと、浩一は人のいない廊下で圭介に言った。

「お前には無理やと思ってた」

「知ってる」

「悪かった」

圭介は何も言えなかった。

帰宅してから、由希子の前で泣いた。

由希子は背中をさすった。励まさず、意味づけもせず、ただ隣にいた。

異なるものをつなぐには、まず、どちらかを正そうとする手を止めなければならない。

由希子はようやく、その難しさと豊かさを知り始めていた。

第十二章　社長の椅子から降りる日

　圭介が社長になって七年、東和工業は少しずつ立ち直った。

売上だけを追うのではなく、利益の出ない仕事を見直し、現場の提案を取り入れ、外部の会社とも共同開発を始めた。

　古い機械を使い続けてきた職人と、三次元設計を学んだ若手社員が組み、これまで作れなかった複雑な部品を作った。

由希子は、その組み合わせを見るのが好きだった。

「ベテランと若手って、すぐ対立すると思ってた」

「違う言葉を話してるだけや」

圭介が言った。

「通訳がいれば、案外うまくいく」

「あなたが通訳？」

「由希子に習った」

由希子は笑った。教えた覚えはなかった。

会社が安定すると、今度は別の争いが生まれた。

叔父の息子である営業部長が、自分こそ次の社長にふさわしいと主張し始めた。外部の株主も巻き込み、役員会の空気は再び険しくなった。

「圭介さんは会社を私物化している」

「夫婦で外部の案件を持ち込んでいる」

根拠の薄い噂が流れた。

由希子は怒った。

「あなたがどれだけ会社を立て直したと思ってるの。全部、記録を出して説明すればいい」

「説明しても、椅子がほしい人には届かへん」

「じゃあ、戦わないの？」

圭介は答えなかった。

臨時役員会で、社長解任の決議が可決された。

圭介は会社を去ることになった。

知らせを聞いた由希子は、七年前の自分に戻った。理不尽を正し、相手の間違いを証明し、奪われたものを取り返したかった。

「弁護士に相談しよう。株主にも話をして、社員の署名を集めて」

「由希子」

「諦めるの？　あなたの会社でしょう」

「僕の会社やない」

「あなたが立て直したのよ」

「それでも、僕のものやない」

圭介は静かだった。

「僕は、社長になりたかったんやなくて、会社を立て直したかった。それは、もうやった」

「でも、こんな終わり方」

「終わり方を選べへんこともある」

　由希子は泣いた。自分が解任されたわけではないのに、夫の七年が否定されたようで悔しかった。

　圭介は、社員一人ひとりに挨拶をして会社を去った。最後の日、工場の若い社員が封筒を持ってきた。中には、百人近い社員の短い言葉が書かれていた。

〈話を聞いてくれる会社にしてくれて、ありがとうございました〉

〈失敗を報告しても怒鳴られない職場になりました〉

〈違う部署の人と、一緒に仕事をする面白さを知りました〉

圭介は車の中で、その紙を何度も読んだ。

「僕がやりたかったこと、残ってたわ」

由希子は頷いた。

肩書きは取り上げられても、そこで生み出した関係までは奪えない。

　それでも、翌朝から圭介は行く場所を失った。

六時に起き、スーツを着かけてやめる。新聞を読み、庭を掃き、昼前になると所在なさそうに台所へ来る。

「何か手伝おうか」

「大丈夫」

由希子は答えてから、言い直した。

「じゃあ、玉ねぎを切って」

圭介は嬉しそうに包丁を持った。

「大きさ、これくらい？」

「適当でいい」

「由希子が適当でいいって言った」

「歴史的な日ね」

二人は笑った。

仕事を失った時間は、空白ではなかった。

　圭介は、これまで出会った会社を訪ね歩いた。技術はあるが売り方がわからない町工場。商品はよいが量産できない小さな食品店。若い後継者と古参社員が対立している家業。

「どこも、東和工業と似てる」

圭介は言った。

「いいものを持ってるのに、つながってない」

由希子の胸に、旅程を組んでいた頃の感覚が戻った。

この人と、この会社を結んだら何が生まれるだろう。

世界地図の上で都市と都市を線で結んだように、人と人、技術と技術、思いと思いを結ぶ仕事。

「ねえ、会社を作らない？」

由希子が言った。

「何の会社？」

「まだわからない」

圭介は目を丸くしたあと、笑った。

「由希子が、わからないことを始めるん？」

「わからないから、面白いんでしょう」

昔、圭介が言った言葉を返すと、二人の間に新しい道が開いた。

第十三章　ふたりの会社

　二人は、小さな事務所を借りた。

駅から徒歩十五分、築三十年のビルの三階。
窓は一つ、机は二つ。
雨の日には廊下の端にバケツが置かれた。

会社名は「リアン」にしましょう！

「どういう意味？」

「フランス語でね、人と人とを繋ぐとか、結びつきっていう意味よ」

「縁結びみたいやな」

「それでいいの。人と人だけじゃなく、技術と商品、会社と地域、過去と未来を結ぶの」

「説明が長い会社名やな」

「名前は短いでしょう」

　最初の仕事は、知人の金属加工会社からの相談だった。医療器具に使えるほど精密な加工技術を持ちながら、下請けの仕事が減り、自社商品を作りたいという。

一方、由希子が参加した地域の交流会には、握力の弱い高齢者でも開けやすい保存容器を考案した女性がいた。アイデアはあるが、試作品を作れる会社を知らなかった。

由希子は二人を引き合わせた。

最初の打ち合わせは散々だった。

「そんな薄い部品は、量産したら歪みます」

「でも、厚くしたら高齢者には重いんです」

「現実を知らないアイデアでは作れません」

「技術の都合だけで決めたら、使う人が困ります」

二人は互いに不満を募らせた。

由希子は以前なら、どちらが正しいかを判断し、落としどころを提示しただろう。

今は、両者に尋ねた。

「絶対に手放したくないものは何ですか」

女性は「握力が弱くても、自分で開けられること」と答えた。

加工会社の社長は「壊れず、安全に量産できること」と答えた。

「では、軽さと強さを両立させる方法を探すのが、今回の仕事ですね」

対立していた言葉が、一つの課題に変わった。

　半年後、二重構造の軽量蓋が完成した。発売数は多くなかったが、利用者から「人に頼まず開けられた」という手紙が届いた。

由希子は、その一文を何度も読んだ。

人に頼らずできることを増やす商品を作りながら、商品そのものは多くの人が頼り合って生まれている。

自立と依存は、反対ではないのかもしれない。

できることは自分でし、できないことは誰かとつながる。その循環が、人を自由にする。

　リアンの仕事は少しずつ増えた。

廃棄される果物と菓子職人をつなぎ、新しいジャムを作った。伝統織物の職人と若いデザイナーをつなぎ、仕事着を作った。後継者のいない木工所と、家具を学ぶ学生をつないだ。

もちろん、すべてがうまくいくわけではなかった。

契約寸前で条件が合わず、話がなくなることもあった。自分の利益だけを求める人もいた。由希子が双方に気を遣いすぎ、疲れ果てることもあった。

「また、全部背負ってる」

圭介に指摘されると、由希子は不機嫌になった。

「私がやらなきゃ進まないの」

「進まないなら、止めたらええ」

「簡単に言わないで」

喧嘩になった。

由希子は事務所を飛び出し、駅前のベンチに座った。私は何も変わっていない、と落ち込んだ。

だが、しばらくすると圭介から短いメッセージが届いた。

〈コーヒー買った。事務所で待ってる〉

以前なら、どちらが正しいか決着がつくまで戻れなかった。

由希子は立ち上がった。

変わるとは、二度と同じ反応をしないことではない。同じ場所に迷い込んでも、戻る道を知っていることだ。

　事務所に戻ると、圭介は由希子の好きな薄いコーヒーを机に置いた。

「ごめん。私、また必要とされようとしてた」

「必要やで」

「そういうことを言うと、また頑張るでしょう」

「じゃあ、必要やけど、頑張りすぎたら迷惑」

「ちょうどいい」

　二人は、仕事の一部を外部の事務スタッフに頼むことにした。

由希子にとって、それは会社を大きくすることより難しい決断だった。

それでも、誰かに任せることで、リアンに新しい人の知恵が入った。

異なるものをつなぐ会社が、由希子一人のやり方だけで動いていたら、看板倒れである。

由希子は、仕事そのものに教えられていた。

第十四章　受け継がれたもの

　リアンを始めて三年目の秋、澄子が亡くなった。

前日まで普通に話していた。朝、起きてこないことに正治が気づいた。眠るような顔だった。

由希子は故郷へ急いだ。

　母の箪笥を整理していると、奥から赤い子ども服が出てきた。結婚前に見せられた、由希子の小さな上着だった。

その下には、何冊ものノートがあった。

家計簿だと思って開くと、由希子と和也の成長記録だった。

〈由希子、初めて一人で靴を履いた。得意そうな顔。〉

〈由希子、学芸会の代役を立派にやった。和也が泣いて、終わってから褒められなかった。あとで言おうと思って、そのままになった。〉

〈旅行会社に合格。私にはできなかったことを、この子はしていく。うれしい。遠くへ行ってしまうようで、寂しい。〉

由希子は、その場に座り込んだ。

母は見ていた。

言わなかっただけで、由希子の一つ一つを見ていた。

ノートの最後のほうには、こう書かれていた。

〈由希子が迎えに来てくれた。疲れたでしょうと言われた。あの子に初めて甘えた。母親なのに、情けない。でも、うれしかった。〉

由希子はノートを胸に抱いた。

「お母さん、遅いよ」

涙の中で笑った。

　葬儀のあと、正治がぽつりと言った。

「母さんは、お前の会社の話を近所の人にしてたぞ」

「何て？」

「由希子は、人と人をくっつけて、新しいものを作る仕事をしとるって」

「だいたい合ってる」

「自慢しとった」

由希子は窓の外を見た。庭の柿の木に、実がいくつか残っていた。

子どもの頃、澄子は柿をむき、由希子と和也に同じ数ずつ分けた。由希子はいつも、病弱な和也のほうが大きいと思っていた。

母の愛情を、量っていたのだ。

自分の皿と弟の皿を比べ、夫からもらう言葉と玲奈がもらった言葉を比べ、会社で認められた数を数えていた。

愛情は、同じ形で、同じ量だけ与えられるものではなかった。

だからこそ、言葉が必要だった。違う形の愛情を、相手に届く形へ翻訳する必要があった。

母は、その翻訳が苦手だった。

由希子も同じだった。

けれど、その受け継いだ苦手なものを、そのまま次へ渡す必要はない。

受け取れなかった言葉を、自分から言い始めてもいい。

大阪へ戻った夜、由希子は美咲と遥を呼んだ。

二人はすでに家を出ていたが、葬儀のため戻っていた。

「お母さんね、あなたたちに謝りたいことがある」

由希子は、二人が幼い頃、自分でできるでしょうと突き放したこと、正しい答えを急いで気持ちを聞かなかったことを話した。

美咲はしばらく黙り、言った。

「お母さん、今もすぐ答えを言うよ」

「そうね」

「でも、途中で気づくようになった」

遥が笑った。

「昔は、最後まで止まらなかったからね」

三人で笑った。

「それから」

由希子は二人を見た。

「生まれてきてくれて、ありがとう。あなたたちが何かできるからじゃなくて、いてくれることがうれしい」

美咲が目を伏せ、遥が鼻をすすった。

「それ、おばあちゃんにも言ってほしかったね」

「うん。でも、たぶん知ってたと思う」

言葉にできなかったものが、消えるわけではない。

言葉にならなかった愛も、今こうして母から私へ、そして娘へと受け継がれたのです。

言葉にすることで、未来へ渡る形は変えられる。

自分から新しく始めようと思った。

由希子は母のノートを閉じた。

エピローグ　結婚も仕事も

　茶舗の三代目と乾物屋が作った「だし香る焙じ茶」は、最初の試作品から六回作り直された。

昆布が強すぎたり、茶葉の渋みが残ったり、名前が決まらなかったりした。

途中、乾物屋が「もう普通の昆布茶でいい」と言い、三代目が「それでは私の店で出す意味がない」と席を立ったこともあった。

由希子は、二人を説得しなかった。

「この商品で、何を生み出したかったんでしたっけ」そう尋ねた。

三代目は、亡くなった祖父の話をした。冬になると店先で焙じ茶をいれ、商店街の人に振る舞っていたこと。

乾物屋は、店を閉めようと思っている母の話をした。昆布の味を覚えている人が減り、自分の代で終わるかもしれないこと。

二人が作りたかったのは、珍しい飲み物ではなかった。

商店街の記憶を、今の人が手に取れる形にすることだった。

七回目の試作品は、焙じ茶の香ばしさの後ろから、昆布のうま味が静かに残った。

「これです」

三代目が言い、乾物屋が頷いた。

　発売の日、二つの店の間に小さな屋台を出した。湯気の立つ紙コップを、若い夫婦、買い物帰りの老人、学校帰りの子どもが手に取った。

「不思議な味。でも、もう一口飲みたくなる」

客の言葉に、三代目と乾物屋は顔を見合わせて笑った。

由希子は少し離れたところで、その様子を見ていた。

圭介が隣に立った。

「うまくいったな」

「まだよ。商品は、売り続けて初めて仕事になるから」

「相変わらず厳しいな」

「でも、今日は喜んでいい」

二人は焙じ茶で乾杯した。

「僕らも、だいぶ違うな」

圭介が言った。

「何が？」

「由希子は何でも一人でやる。僕は誰かに頼る。由希子は計画を立てる。僕は走りながら考える」

「あなたは忘れ物をする。私は忘れた人を責める」

「最後のは、組み合わせても新しい価値が出えへん」

由希子は笑った。

　結婚した頃、由希子は違いを危険だと思っていた。自分と同じように考え、同じように動く人なら傷つかないと思っていた。

けれど、同じものだけを重ねても、世界は広がらない。

　違いは、放っておけば衝突になる。どちらかを消そうとすれば支配になる。違いを美しい言葉で包むだけでは、我慢になる。

　必要なのは、相手を変える前に、自分が何を守ろうとしているのかを知ること。そして、相手にも守りたいものがあると認めることだった。

その間に、二人で扱える問いを置く。
その奥に思いが重なる瞬間がある。

　夫婦なら、どちらが正しいかではなく、二人はどんな関係を生み出したいのか。

　仕事なら、どちらの利益を優先するかだけでなく、一緒に何を生み出せるのか。

由希子は、ようやく自分の人生の題名を見つけた気がした。

「ねえ、圭介」

「何？」

「結婚も仕事も、異なるものをつなぐパートナーシップなのね」

「長いな」

「大事なことは、少しくらい長くていいの」

「会社名にせんでよかった」

二人はまた笑った。

　商店街の向こうから、夕方の光が差していた。

三代目が客に茶を注ぎ、乾物屋が商品の説明をしている。違う店の二人が、一つの屋台の中で、それぞれの言葉を持ち寄っている。

由希子は、その光景を見ながら思った。

人は、一人で完成する必要はない。
できないところを隠さなくてもいい。
違いを恥じなくてもいい。

結ばれることで、初めて現れる自分がいる。

五歳の由希子は、一人で水を汲んだ。

今の由希子は、隣にいる圭介へ紙コップを差し出した。

「もう一杯、飲む？」

「入れてくれる？」

「ええ。一緒に行きましょう」

二人は屋台へ向かって歩き出した。